【学生の報告】 チャレンジ支援奨学金

地球市民学科　4年　伊奈　東子さん

－奨学金の支給対象となった活動はどのようなものですか。

留学先の台湾で、外国人労働者の受け入れの実情について、3ヶ月間かけて調査しました。

週末の台北駅の広場では、本国にいる家族と電話を楽しむ外国人労働者を多く見かけます。少子高齢化が進む台湾社会は、日本と同じように外国人労働者に支えられているからです。日本で技能実習生について調査を行った経験から、台湾の実情を探るため、支援が必要な外国人労働者にシェルター提供を行う団体や外国人労働者のコミュニティを訪問し、インタビュー調査を行いました。

インタビューでは主に英語を使いましたが、外国人労働者コミュニティでは英語が通じないこともあり、翻訳機や中国語を使ってコミュニケーションを行いました。

－現地での活動を終え、今どのように感じていますか。

台湾は日本よりも外国人労働者にとって働きやすいのではないかと想像していましたが、台湾でも日本と同じように人権問題が起きていることが分かりました。

例えば、ヘルパーとして家で働いていた外国人労働者が介護者からセクハラ被害を受け、多言語相談窓口に相談したものの、「我慢しなさい」と言われたそうです。多言語対応の機関はあるものの、それが相談窓口として役に立っていないという現状がありました。一方、外国人労働者の各国のコミュニティを訪問した際は、とても賑やかで楽しい雰囲気でした。フィリピン人が多く集まるエリアではタガログ語でミサが行われ、2階に美容院やレストランなどのお店が並ぶビルがあり、別の場所に来たかのように感じました。また、台湾では彼らを「新移民」と呼んでいるのが印象的でした。

－この経験を今後どのように活かしていきたいですか。

今回の調査では、アポ取りや他の言語を使ったインタビューが特に難しかったです。事前準備の重要性を改めて感じたので、反省点を今後の研究に活かしていきたいと思います。

また、調査で訪れた、外国人労働者が集う国ごとのコミュニティでは、食べ物から服やアクセサリまで出身国の物がとりそろえられていて、レストランのメニューも出身国の言葉で書かれていました。

家族と離れ、孤独が生じやすい異国での生活ではそのようなコミュニティが彼らの重要な支えになっていると気が付きました。日本では、外国人労働者のコミュニティが現在どのくらいの規模で存在しているのか、日本人との関わりがどのように存在するのかに興味があります。次回は、台湾の状況と比較するため、日本の外国人コミュニティも見にいきたいと思っています。

－チャレンジ支援奨学金をめざす学生の皆さんへ、メッセージやエールがあれば聞かせてください。

チャレンジ支援奨学金は、私たち学生の「知りたい」がかなう、恵まれたチャンスです。奨学金の受給が決定し、報告書提出の時間的制限があったからこそ、責任を持って調査を行うことができました。

アポ取りや取材がうまくいかないこともありましたが、失敗も良い経験だったと思います。また調査中に、インドネシア人街で歌をプレゼントされたり、フィリピン人コミュニティで、初対面の人から「私の日本人の娘」と言ってもらったりするなど、思わぬ出会いや経験がありました。

領収書やレシートの管理は、レートの違いなどもあり少し大変でしたが、良い学びになりました。より多くの学生が自分の探究心に正直に、この奨学金に応募してほしいと思います。

台北駅から5分ほどで着くインドネシア人街。週末は多くの人が行き交い、賑やか。

桃園にある、雇用先から逃れてきた外国人労働者を保護するシェルターで取材中の伊奈さん。